裸の王様

開高　健

文藝春秋新社

裸の王様

著者略歴

1930年、大阪に生まる。
舊制大阪高等學校を經て
1953年、新制大阪市立大
學法科を卒業。現在書籍
宣傳部勤務。
現住所
東京都杉並區向井町116

昭和三十三年三月十日　初版
昭和三十三年三月二十日　再版

著作者　開高健
發行者　車谷弘
印刷者　田中末吉
發行所　文藝春秋新社
東京都中央區銀座西八ノ四
振替口座東京七八七四三番

印刷　理想社
カバー他　凸版印刷
製本　加藤製本

落丁亂丁の際はお買求めの書店又は發行所にてお取換致します

定價二五〇圓

© 1958 Takeshi Kaikō　Printed in Japan

目次

裸の王様　五
ハニック　九五
巨人と玩具　一二三
なまけもの　一三九

口繪　著者近影　撮影　長野重一

裝幀　坂根　進

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

裸の王様

裸の王様

一

大田太郎は山口の紹介でぼくの畫塾へくることになつた。山口は小學校の教師をするかたわら自分でも畫を描いている男である。抽象派のグループに屬していて、展覽會があると學校を休んでも制作にふける。太郎のときも、ちようど個展の會期に迫られていたので、自分の擔任クラスの生徒でありながら、ぼくのところへまわしてよこしたのである。學校から歸ると夜しか制作する時間がないので彼は多忙をきわめていた。

「ぼくのパトロンの一人息子なんだよ。個展がすんだら、あとはひきうけるから、それまでなんとかしてやつてくれよ」

そんなことでぼくはむりやり承諾させられてしまつた。

太郎と兩親のことは以前にあらましを山口から聞かされていた。太郎の父は大田繪具の社長で、母は後妻ということだつた。先妻、つまり太郎の實母は大田氏の不遇期に死んで、それ以後子供はないので、太郎はまつたくの一人息子である。山口は擔任學級のＰＴＡで大田夫人と知りあいになつた。何度か會つているうちに彼は彼女をつうじて大田氏にわたりをつけ、グループ展や個展があると、ときたま一點、二點と畫を買いあげてもらうところまで懇意になつた。むかしから彼はそんなことにかけては機敏な男であつた。

大田氏の繪具會社はさいきん急速に發展した會社である。それまでは親會社から獨立した中小メーカーにすぎなかつたが、いまでは強力な販賣網を市場にひろげて舊勢力をおびやかしている。どこへいつても大田氏の製品を賣つていない文房具店はないくらいである。ぼくの畫塾で使う繪具類もぼくが自分でつくるグワッシュをのぞけばほとんどが氏の製品だ。庇護にこたえる氣持からか、山口は大田氏がパステル類やフィンガー・ペイントなどの新製品を發賣するといちはやくとりあげて生徒に教室で使わせ、その實驗報告を教育雜誌や保育新聞などに發表した。前衞畫家としての立場から彼は新手法の紹介には熱心で、コラージュやデカルコマニーやフロッタージュなど、たえずなにか新奇な實驗をやつて話題を投げていた。畫の背後にある子供の個性を、そうした偶然の效果をねらつた手法の、畫だけの個性にすりかえてしまう危險をふくんでいるにもかかわらず、彼の仕事は若い教師仲間でたいへん評判がよかつた。さいきんでは印畫紙のうえにさ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

まざまな物をのせて感光させる〝フォト・デッサン〟を發表した。小學校の子供には材料費が高すぎるという非難を浴びながらもそれはひとつの意欲的な試みとして評價された。

「子供は小學校に入るまでにすっかり萎縮してしまってるからな。概念くだきはいくらやってもやりすぎるということがないよ」

兒童畫の目的と手段をはきちがえた行過ぎの實驗だという保守派からの反論に對して彼はいつもそううそぶいてひるまなかった。

コラージュはさまざまな色紙や新聞紙や布地を任意にちぎっては貼りかさねるという手法である。フロッタージュは木や石に紙をあててうえからクレヨンでこすって木目や石の肌理をうきださせる。デカルコマニーというのは紙に水彩のしみをつけ、まだぬれているうちに二つに折って左右相稱の非定形模様をつくる手法である。これはマックス・エルンストが考えだした。いずれも子供の自我を通過しない自動主義だという點ではかわりがない。これらの手法が子供の抑壓の解放に役だつことはみとめられねばならないし、ぼく自身もときどき試みるが、それがすべてなわけではない。ただ、山口のやりかたにはどこか賣名を計算した野心家の匂いがあるので、彼が生徒につくらせる作品の無機質な美しさにぼくはいつも警戒心を抱いている。

どういうものか、山口は庇護をうけているにもかかわらず、ぼくにむかってはたいてい大田夫人のことをわるくいった。

「なに、あれはちよつとばかり氣前のよいＰＴＡマダムさ。寄附さえ頂戴すればいいんだよ」
そのほか、たとえば、大田夫人が後妻だから先妻の子の太郎にことさら善意をおしつけるのだとか、外出好きな性格だとか、ときには夫妻の寢室に對する嘲笑的な臆測などといつた種類の醜聞である。庇護をうけているのだというひけめを彼はそんな形で補償したがつているのかも知れなかつた。いつもぼくは彼の惡口を聞きながして、まともには耳をかさないことにしていた。山口は利己的な男で、自分の都合のよいときだけ責任を他人におしつける癖があつた。太郎のときも、さんざんそんなふうにいつておきながら、いざとなると個展の日まで日數のないことや、カンバスの枠張りに手間をとられたことや、先方のたのみがことわりきれないことなど、自分勝手な辯解ばかりならべて逃げてしまつた。
「歩いてくるのならひきうける。自動車でくるのならごめんだ。ぼくの生徒はみんな貧乏サラリーマンの子供だからね、自家用車なんかでのりつけられてはたまらないな」
ぼくはそれだけいつて電話をきつた。山口がこれをどうつたえたのか、ぼくは知らない。約束の日、たしかに大田夫人は歩いてくることは歩いてきたが、歸りに門口まで送つてゆくと、ぼくの家から一町ほどさきの辻に一臺の新車がとまつていた。夫人が息子の手をひいてそちらに歩いてゆくと、金屬製の應接室を思わせるその當年型のシボレーから制服制帽の運轉手がとびだしてきて護衛兵のように扉のまえにたつたのである。生徒はみんなアトリエで畫に夢中だつたので、

誰も氣のつくものはなかつたが、ぼくはにがい氣持がした。

想像していたより太郎はひどい歪形をうけていた。彼は無口で内氣で神經質そうな少年で、夫人とぼくが話しているあいだじゆう身じろぎもせず背を正して椅子にかけていた。その端正さにはどことなく紳士を思わせるおとなびたものさえあつた。寢室と書齋と應接室をかねたぼくの小部屋で會つたのだが、たいていの新入の子が眼を輝かせる壁いつぱいの兒童畫に對しても彼はまつたく興味を示さなかつた。彼は窓からさしこむ日曜の正午すぎの日光を浴びて、ものうげに机の埃りを眺めていた。母親が彼の名を口にだすたび、彼は敏感さと用心深さをまじえたすばやいまなざしでぼくの顏をうかがい、ぼくがなんの反應も示さないとわかると、またもとの無表情にもどつた。その白い、美しい横顏にぼくは深傷(ふかで)を感じた。

子供には子供獨特の體臭がある。ぼくはいつでもそれを自分の手足にかぐことができる。ぼくの皮膚そのものが子供のものではないかという氣がするくらい、それは體にしみついている。日なたでむれる藁のような、乾草のような、甘いが鼻へむんとくる匂いである。子供はその生溫い異臭を髮や首や手足から發散させてひたおしに迫つてくる。ところが、太郎にはそんなむんむんしたにごりがまつたく感じられなかつたのである。壁と本棚にある童話本やポスターやおびただしい兒童畫など、なにをみても彼は顏いろをうごかさなかつた。ぼくの部屋には子供の陽氣な叫びや笑いや格鬪や空想など、さまざまな感情の原形體がみちているのだが、太郎はなにひとつと

して浸蝕をうけないもののようであつた。ときどき服の皺を氣にしながら、ほつておけば二時間でも三時間でも彼はいわれるままに椅子に坐つていそうな氣配であつた。兩膝にきちんとそろえておかれた彼のきれいにつまれた爪をみて、ぼくはよく手入れのゆきとどいた室內用の小犬をみるような氣がした。

「學科もわりによくできるほうですし、わがままなところもないんですが、なんだかたよりないんですの。畫を描かせても男の子のくせに人形やチューリップばかり。まあ畫はできなくても主要學科さえ人なみなら將來かまわんだろうと、主人は申すんでございますが……」

大田夫人は息子の薄弱さを訴えながらも、どことなくしつけのよさを誇りにしているようなところがあつた。もし後妻だということを聞いていなければぼくはそのまま彼女を太郎の母親として信じてしまつたかもしれない。彼女の口調やものごしはつつしみ深く、上品で、ドレスも澁い色のものを選んでいた。息子に對する善意のおしつけはさておき、彼女が外出好きで派手な性格だという山口の毒をふくんだ說明を、すくなくともその場でぼくはみとめる氣になれなかつた。

ただ、彼女が小學校二年生の子供の母親として注意深くふるまつているにもかかわらず、どこか年の若さが包みきれずにこぼれるのはさけられないことであつた。どうかしたはずみに彼女の動作や表情のかげにはいきいきしたものがひらめいた。彼女が腕をあげたり、體をうごかしたりすると、おちついたドレスのしたでひどく敏捷な線が走るのにぼくは氣がついた。彼女の顎にも

首にも贅肉や皺のきざしはほとんどといつてよいほど感じられなかつた。

「なにしろ主人はああして忙しいもんでございますから、子供のことなんか、まるでかまつてくれないんでございます。私ひとりであれこれ手本を買つてやつたりもしてみたんですが、しろうとはやつぱりしろうとで、眼を放したらさいご、もう描いてくれません」

彼女はそういつて苦笑し、太郎のスケッチ・ブックをとりだした。彼女はそれを一枚ずつ繰つて、どういうふうにして描かせたかという事情をいちいちていねいに説明しはじめた。太郎はだまつて禮儀正しい姿勢でそれを聞いていたが、ぼくは大田夫人からスケッチ・ブックをとりあげると、それとなく話題をあたりさわりのない世間話にそらせてしまつた。すこし兒童畫に知識のある母親なら誰でもがやりたがるように彼女は畫で子供の症狀を説明しようとしたのだ。子供のいるまえでそんなことをやれば、せつかくの善意も負荷をのこすばかりである。子供は畫で現實を救濟しようとしているのに傷口をつつきまわされ、酸をそそがれたような氣持になつてしまう。その結果ぼくに提供されるのは、防衛本能から不感症の膜をかぶつた恐怖の肉體だけである。たいていの子供がイソップの蛙である。母親のなにげない言動が彼らをおびやかし、自分でも原因のわからない硬化を暗部に起して彼らは苦しんでいる。

ぼくは電熱器で紅茶をわかすと大田夫人と太郎にすすめ、世間話をしながら太郎の日常のだいたいの背景を聞きこんだ。大田夫人は太郎に家庭教師とピアノ教師をつけていることを話したが、

それが彼の自由をどれだけ殺しているかについては疑念を抱いていない様子だつた。いろいろ畫塾の方針などを話したあとで、ぼくが、山口ともよく相談しようというと、彼女はふいにそつぽをむいた。それまでのつつしみ深さにくらべてこの動作は小さいけれど意外だつた。

「あの人はあてになりませんわ」

太郎への配慮から彼女は早口に小聲でつぶやいた。口調はやわらかいが、そこにはつきり斷定のひびきがあつて、ぼくは壓されるものを感じた。彼女はちらとぼくをみてすぐ視線をそらせたが、その眼にはわかわかしい、いたずらつぽそうな輝きがのこつていた。

つぎの日曜からかよわせることを約束して大田夫人が太郎をつれて歸つていつたあと、ぼくはさつそくスケッチ・ブックをひろげたが、豫想どおりのものしか得られなかつた。太郎はクレヨンを使つても、クレパスを使つても、電車や人形やチューリップばかり描き、どの畫をみても人間がひとりも登場していなかつた。彼はすでに圖式や象徴の時期を脱して、そろそろ視覺的リアリズムをおしださねばならない年齡に達しているにもかかわらず、スケッチ・ブックのなかにあるのは、いずれも努力をとちゆうで放棄した類型のくりかえしにすぎなかつた。どの畫用紙も餘白が多く、描かれた線には對象への傾倒がまつたく感じられなかつた。とりわけ人間がひとりも描かれていないという事實は彼の不毛をそのまま物語るもののごとくであつた。白い沈默の頁を繰りながらぼくは孤獨の處方箋をあれこれと思いめぐらした。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo